

「冷戦」の系譜——社会学の哲学批判

米 虫 正 巳

I

1951年にメルロ＝ポンティは当時の哲学と社会学の関係について次のような診断を下している。「哲学と社会学は長い間分離体制の下で存続してきており、この体制は如何なる対決の場も両者に与えず、両者の発展を妨げ、両者を互いに了解不可能にするだけであって…哲学と社会学の敵対関係を覆い隠すに至った」(M, 123)。つまり「哲学と社会学の分離」(M, 123)が生じ、哲学も社会学を含む学問一般も、その展開が損なわれてしまっているというのがメルロ＝ポンティの認識であった。彼によればこの分離という状況は哲学者と社会学者の間での暗黙の了解事項となっており、両者は互いに交流しないということについては完全に合意し合っている。

メルロ＝ポンティはこの分離状況を打開するために、フッサール現象学と社会科学との理論的な結びつきを確認することで哲学と社会学の接点を取り戻そうとするのだが、ここで我々の興味を引くのはそうしたメルロ＝ポンティの選択であるよりはむしろ、彼が言うところの「冷戦 la guerre froide」が哲学と社会学の間には存在しているという事実である。分離によって哲学と社会学の争いは覆い隠されたように見えるにせよ、それが無くなってしまった訳ではなく、両者の「冷戦」というものが現に存在しており⁽¹⁾、その冷戦においては「哲学と社会学は人心を得ようと争っている」(M, 124)というメルロ＝ポンティの指摘に注目してみたい。

ここで冷戦と呼ばれているものは学問的世界内部での哲学と社会学との闘争

であるが、メルロ＝ポンティは社会学者からの次のような批判を取りあえずは受け入れる。「社会学者は哲学者に対し次のように言う。あなたは永久に万人のために思惟していると思っているが、まさにそのことでああなたはあなたの文化の偏見ないしは野心を表現しているだけなのだ、と」(M, 137)。つまりいかに哲学が自らの普遍性・永遠性を装おうとも、特定の文化と歴史への帰属性・依存性からは逃れようもない。その批判に従うなら、「哲学者の『観念』や『明証性』は或る程度は常に素朴」であり、「それらは哲学者の属する文化の織物の中に捕らわれている」(M, 136)。メルロ＝ポンティはそれを認めた上で、そう言う社会学者もまた同様の帰属性・依存性を担わざるを得ないという当たり前の事実を指摘し、そこから哲学の社会学に対する独自性を帰結として導き出そうとする。

メルロ＝ポンティの導き出した帰結の妥当性はさておき、我々がまず気づかされるのは、こうした冷戦の中での社会学者の側からの哲学に対する批判が、メルロ＝ポンティの状況診断から 50 年近く経とうとしている今現在でもさほど変わってはいないという事実である。例えばピエール・ブルデューの批判。ブルデューは、社会学的分析を前提するという条件の下でのみ哲学は有効なものとなり得ると主張する。彼によればまず「哲学を文化生産界と社会空間の中に置き直す」(B 1992, 131) 必要があるし、それを行うことこそ社会学的分析の仕事である。社会学的分析だけが、「哲学者の最も一般的な思考の道具、つまり諸概念、諸問題、諸分類法が、それらの（再）生産の社会的諸条件と、哲学制度の機能と作用に根ざした社会的哲学の中に刻み込まれている決定諸要因に負っている全てのことを見いだす」(B 1992, 132) ことを可能にし、それによって社会学は「様々な哲学とそれらの継承を完全に理解するただ一つの手段」(B 1992, 131～132) となる。その（再）生産の社会的諸条件や制度的な決定諸要因によって哲学が規定される限り、「哲学者たちの遺産の中に刻み込まれている思考されざるもの」、「哲学者の思考の社会的な思考されざるもの l'impensé social」が存在しているが、それを「再び我がものとする手段を哲学者に与える」のはあくまでも社会学であって (B 1992, 132)、哲学ではない。

こうしてブルデューに従えば、哲学が自らの活動を十全に理解しようとするならば、何よりもまず社会学を踏まえなければならないということになる。

哲学に対する社会学の側からの現代におけるこのような批判の仕方が、1951年にメルロ＝ポンティの想定していた批判の場合と本質的には同じものであることは容易に気づかれる。哲学に対する「文化生産界と社会空間」の先行性、哲学のそれらへの帰属性・依存性を原理とした批判としては両者は何ら変わるところはないし（勿論その社会学としての内容は現在の方がより精緻で綿密なものとなっはいるのであるが）、普遍的であると自称する哲学の非普遍性の指摘から、全てを思考すると称する哲学に内在的な思考されざるものの指摘に至る距離もさほど遠いものではないだろう。そこから哲学に対する社会学の優位が導き出されるようなこうした哲学批判の妥当性の検証の試み、あるいはこうした批判に対する哲学の側からの反論の試みは、それはそれで検討すべき重要な課題ともなり得ようが、我々がここで問題にしたいのはそのことではない。

我々が気づかされるのは、「冷戦」における社会学の哲学への批判がメルロ＝ポンティの時代から50年近く経った現在でも変わっていないことだと既に述べた。しかも我々が1951年のその光景に時間を遡って立ち会うことができたのなら、現在どころか50年近く前のその時点においてですら我々はそのような光景をかつて過去において見たことのあるものと感じてしまうのではないだろうか。実際メルロ＝ポンティが社会学からの批判に応答しようとした時からさらにおよそ50年前に、既にその場面は演じられてしまっているのである。哲学に対する社会学の優位を確認しようとするこのような批判は今に始まったことではないし50年前に始まったことでもない。

以下での我々の考察が目指すのは、哲学と社会学のこのような「冷戦」の系譜の端緒を描き出すこと、つまり哲学と社会学の関係をその後規定することになる構図の最初の姿を、19世紀末から20世紀初頭にかけての哲学と社会学の争いの中に見定めることにある。社会学による哲学批判の妥当性の検証、あるいはこうした批判に対する哲学の側からの反論にしても、哲学と社会学との関係をそれが発生した端緒の時点にまで遡ってその系譜を跡づけておくことで、

初めて見通しの立てられるものとなるだろう。哲学と社会学の関係を規定する構図に接近するためにも様々な切り口があろうが、ここではまず社会学による哲学批判がどのようになされ、そこで如何なる言説が形成されてきたかをデュルケムの内に確認することから始めよう。

II

周知のようにデュルケムが求めていたものは、社会学を実証性を有する一つの学＝科学 *science* として他の諸学から独立させ、その地位を確立することであった。「社会学は他のいかなる学＝科学の付録でもない。社会学はそれ自体明確で自律的な一つの学＝科学である」(D 1895, 143)。ただし一つの学として自律的であるために要求されるのは実証性だけではない。求められるのは「実証性と特殊性」(D 1970, 117)である。つまり「学は、他の諸学が研究しない領域の諸事実を素材とすることでのみ存在理由を持つ」(D 1895, 143, cf. D 1975, 23)。その学の対象がまさにその学にのみ固有なもの・特殊なものであり、他の学によっては取り扱うことのできない場合にのみ、学は一つの学として存在し得る。それゆえ「社会学が存在理由を持ち得るには、社会的と呼ばれるに値し、かつ他の領域の事物の単なる側面ではない実在がなければならない」(D 1975, 23)。社会学はこのような「社会的領域」にその独自性を残しておくことを要求する (cf. D 1970, 130)。すなわち社会学に固有の対象とは社会的事実、社会的事物、社会的基体であり、こうした「社会的基体の研究は明らかに社会学に属する」(D 1975, 19～20)。

他の学では取り扱うことのできない「社会的事実」を対象とする自律的科学としての社会学の確立、デュルケムの努力はそこに注がれることになるのだが、それと共に彼の哲学批判も生まれる。彼は言う。「哲学者が研究する現象は二種類であり、一つは個人の意識に関係する現象、もう一つは社会の意識に関係する現象である」(D 1970, 106)。しかしながらもはや哲学はこれらの現象を取り扱い得ないまま、二つの実証的な学に場を明け渡そうとしている。

「哲学は二つのグループの実証科学に、つまり一方の心理学と他方の社会学に分離しつつある」(D 1970, 106)。こうして一方で個人の意識に関する現象は心理学の対象となり、他方でデュルケムが問題としている社会の意識に関する現象や道徳を含めた社会的事実は全て哲学ではなく社会学の対象となる。「今まで専ら哲学的倫理学に属していた諸問題は社会科学の管轄下にある」(D 1970, 106)。

このようにして社会学は自らに固有の対象を獲得するのだが、それと共に社会学は哲学から自らを差異化して自立するものでなければならない。言い換えれば社会学の自律的な学としての成立とは、まず何よりも哲学からの自立化と差異化である。「もし社会学が生き続けようと望むなら、社会学は最初に負っていた哲学的特徴を放棄しなければならないだろう」(D 1975, 161)。確かに社会学は哲学の中から生まれたと言えるが(cf. D 1895, 139, D 1975, 73, 160 etc.), しかし「もはや一般哲学の一部門に止まるように余儀なくされてはいない」(D 1895, XII)。その親たる哲学からの関係を断ち切ることによってのみそれは初めて実証的な学として生き残り得る。というのも社会学の生誕地としての哲学からの干渉は、むしろ社会学が学として成立することの阻害要因となるからである。「哲学の監督」は「社会学が実証科学として自らを構成することを妨げることしかできなかった」(D 1975, 185)のであれば、この「哲学の監督から社会学を免れさせる」(D 1975, 185)ことが必要となろう。今や社会学は哲学とは全く別の地盤の上に立つのでなければならない(cf. D 1893, XXXVIII)。こうして哲学からの関係を断ち切り、「社会学は全く哲学的ではない」(D 1975, 161)という非哲学化、社会学の方法はどんな哲学からも独立している(D 1895, 139)という脱哲学化を押し進めること、それが学としての社会学の成立条件となる。「社会学が科学の名に相応しくあるためには、社会学が、個人的傾向に応じて多かれ少なかれ偶然に選ばれた社会生活の幾つかの局面についての単なる哲学の変奏とは別のものでなければならない」(D 1975, 19)。

デュルケムによって哲学との関係から切り離されて非哲学化・脱哲学化した

社会学は、他の様々な隣接する諸学に対しても特権的な位置を占めることになる。「社会についての統一科学を現実化するための唯一の手段は、本質的に社会学的特徴を有する専門的学問の全てを一つの体系の中に統合することに存すると、社会学者は認めなければならない」(D 1975, 167)。つまりデュルケムには社会学による社会科学の組織化と統一という理念が存在し(cf. D 1975, 168~169)、比較法制史、比較宗教史、人口統計学、経済学、政治地理学など、それぞれ別々の孤立した個別専門的な学問に統一性と基礎を与えるのは社会学に課せられた仕事に他ならない(cf. D 1970, 126~127, D 1975, 31~34, 167~168)。社会学によってこそこれら個々の学は組織化され統一化され、「互いに何の繋がりもなく説明的価値もないモノグラフィー」(D 1970, 127)ではなくなる。こうして社会学は諸学を統一する中心的立場において自らを際立たせ、またそうであるからこそデュルケムは、「社会学という言葉は人間的領域を対象とするあらゆる科学の深い革新の兆しであり、そうあり続ける」(D 1975, 35)と自負することができたのである。

しかしデュルケムは社会諸科学の組織化と統一という課題を担った社会学の哲学に対する関係をめぐる議論を更に先に進める。社会学は哲学から自らを差異化するだけでは十分ではない。自らを哲学から切り離さなければならないだけでなく、社会学は自らの生誕地である哲学からの関係を断ち切りつつ、同時に哲学への関係を打ち立てなければならないのである。社会学は隣接する諸科学に対してだけではなく、哲学に対しても特権的な位置を占めなければならない。

「哲学は実証諸科学の中にその拠点を持たないならば、文学の一形式でしかあり得ないと今日誰もが認めている」(D 1975, 186)というのが哲学の当時の状況についてのデュルケムの認識であり、このようにもはや空虚な営みと化した「哲学は現存する科学にとって変わろうとするべきではない」(D 1975, 181)。文学の一形式と化した哲学それ自身の内にはもはや具体的な考察の素材は残ってはおらず、今や哲学に許された延命策・再生策は社会学を手引きとすることしかない。もし哲学が社会学に訴えるのであれば、社会学は「哲学的

反省に対してより独創的な素材を提供する」(D 1895, 140)。社会学によってのみ「哲学者は事態の統一性に気づくことを期待できる」のであって、そこから帰結するのは「社会学は哲学にとって予備教育の中で最も有益」だということである (D 1975, 187)。具体的に学校教育制度の面で言うなら、哲学教育の中の至る所で社会学が行われるべきであるとデュルケムは主張する (cf. D 1975, 51)。

このように社会学の非哲学化と脱哲学化は、今度は哲学の社会学への従属化に向かってゆく。今や社会学は哲学に思索のための素材を提供するだけではない。社会学は「哲学に不可欠で、現在は哲学に欠けている諸基礎を哲学に提供する」とまでデュルケムは考えており (D 1975, 188, cf. D 1895, 140)、ここではもはや哲学を生誕地とする社会学の方が今やその哲学を基礎づけるというふうに事態は変化している。哲学から自らを切り離すことで自己の自律性を獲得するだけでなく、社会学が哲学の自律性を奪うのではなければならない。哲学にとって代わり哲学を自らに従属させること、それが自律的な科学として確立された社会学の要求となっているのである。

III

自律的な科学としての社会学の確立、それは他の社会諸科学を組織化し統一するという理念を有する学の成立でもあったのだが、それはまた同時に自らがそこから生まれた哲学の自律性に疑問を投げ掛けてそれを取り上げ、さらに哲学にとって代わった上でその哲学を自らに従属させようとするものであった。しかしこのことはデュルケムにとって単なる理論的な帰結などではない。確かに社会学を一つの客観的実証科学として確立しようとするデュルケムは、「人間の精神があらゆる実践的な関心を捨象して、事象を自らに表象するためだけにその事象に接する時にのみ、科学は現れる」(D 1970, 113)と述べている。しかし同時に、「まず何より実在を研究しようとするからといって、そこからは、我々がその実在の改良を放棄するということは帰結しない」(D

1893, XXXVIII)。というのもデュルケム自身の「絶えざる関心は、社会学が実践的に結果をもたらし得るようにそれを方向付けることであった」(D 1895, 141) からである。「社会学こそが、社会的實在の諸法則を発見することで、かつてよりももっと注意深く歴史の発展を導くことを我々に可能にする」(D 1970, 142)。

ここにはあらゆる実践的な関心から離れることでかえって実践的な結果を効果的にもたらずというパラドックスがあるのだが、そもそもデュルケムの社会学理論は、当時の第三共和制との関係抜きには成立し得なかったという側面を有している⁽²⁾。彼が「我々においては集合体の精神は衰弱してきている」という現状認識のもとに「我々の社会の有機的統一に再び気づき、個人は彼を取り巻き彼に浸透する社会的全体を感じ、個人はそれを常にそこに現前し作用していると感じ、この感覚が常にその個人の行動を規制するものでなければならない」と主張し、「社会学は他のあらゆる学問以上にこうした考えを再興できると考えている」(D 1970, 109～110) と述べる時に賭けられていたのは、彼の社会学による「共和主義的立場のための科学的根拠付け」⁽³⁾ だったのである。言い換えればデュルケムは「改革的共和政治の根拠付けを提示する」⁽⁴⁾ という課題を担っており、そのことと「規律の精神の中に全共同生活の本質的条件を理解し、この規律の精神を理性と真理の上に基礎づける社会学を作る」(D 1895, 123) ことは密接に関係している⁽⁵⁾。そしてデュルケムが哲学を批判し、文学の一形式に過ぎないと揶揄する理由もここにある。上の課題に答えることは、「実際に社会的諸事実と決して交わることなしに日々社会学的方法について法則を定める哲学者たち」によっては不可能であり、彼らの「抽象的な論究ほど空しいものは何もない」(D 1970, 128, cf. D 1975, 169)。

さて、こうしてみると、100年前のデュルケムの哲学批判、メルロ＝ポンティが50年前に想定していた哲学批判、そして現在のブルデューによる哲学批判と、それぞれほぼ50年の時を隔てて社会学が哲学に投げ掛けた批判がほぼ同じ構造を有していることが理解される。ここではデュルケムとブルデューに限ってその共通点を確認しよう。

まずデュルケムの場合、「集合的思考の特殊なメカニズムと集合的実在の特殊な特徴の内に、我々の観念の形成に対する社会の真の寄与が探し求められるべきである」(D 1975, 193)と言われる。すなわち彼に従えば哲学のような「精神活動」と言えども「その社会的諸条件に関係づけられなければ説明不可能」(D 1975, 51)であり、哲学もまたその「認識の社会的諸条件」(D 1975, 189)を持つということになる。とするなら「集合的に捉えられた集団の諸信念、諸傾向、諸慣習」(D 1895, 8)、つまり「集合体によって制定されたあらゆる信念や行動様式」としての「制度」(D 1895, XXII)の内に哲学もまた位置づけられねばならないということになる。このようなデュルケムの見方が、哲学に対する「文化生産界と社会空間」の先行性、哲学のそれらへの帰属性・依存性という既に見た哲学批判を未だ素朴な形ではあるが先取りしていることは見やすい。

デュルケムによると、このように哲学が社会空間の中に位置づけられることで、例えば哲学が研究し、またその哲学的思考が依拠する「カテゴリー」にしても「歴史の合力の結果、集合的作品」(D 1975, 188)である以上、それを真に考察の対象としうるのは哲学ではなく社会学であるということになる。デュルケムが言うように、我々には「社会学的な事物に哲学的思考の諸形式を適用する習慣がある」(D 1895, XX)ので、社会学者は哲学者であったことを自ら脱ぎ捨てなければならない(cf. D 1895, 140)。こうしたデュルケムの主張も次のようなブルデューの見解に対応していると言えよう。「或る学問の無意識、それは隠蔽され忘却されたその生産の社会的諸条件である」(B 1980, 81)が、これは哲学にも該当する。つまり「『哲学的』とその都度名指されるものの可能性の社会的諸条件」や「哲学という名の下に名指される思考活動に熱中できる人々の立場と性向の中に刻まれた諸前提」(B 1997, 39)が存在するが、それらは哲学者には意識されない。「哲学者がまず何より社会空間の或る場の内に……位置づけられているという事実の中に刻み込まれている様々な拘束や制限」(B 1997, 40, cf. B 1987, 28)を哲学的思考は思考し得えないのである。こうして「哲学者の思考の社会的な思考されざるもの」、¹「哲学者たちの

遺産の中に書き込まれている思考されざるもの」が生み出される。例えばその結果哲学は、「その生産と使用の歴史的諸状況によってはっきりと刻印されている諸概念に歴史的考証を受けさせることを忘れてしまう」(B 1987, 28, cf. B 1997, 54～59)⁽⁶⁾。

従って思惟されざるものを思惟するためには「哲学的活動の社会的諸条件の呼び起こし」(B 1997, 41)が必要となるが、それを哲学に可能にするのが社会学である。社会学は「哲学という名の下に名指される思考活動に熱中できる人々の立場と性向の中に刻まれた諸前提から哲学的思考を解放するという意図を完全に成就させる」(B 1997, 39)。こうして社会学は哲学の自己理解の可能性の条件となり、哲学に対する優位性を獲得する。そして哲学の側から言えば、デュルケムに即して既に見たように、今や哲学に許された延命策・再生策は社会学を手引きとすることしかない。デュルケムにとって社会学は哲学的反省に対してより独創的な思索の素材を提供し、新たな諸観点を与えることで哲学をますます豊かなものにするのであるが(cf. D 1895, 140)、同様にブルデューにとっても、「社会科学は、時に哲学と直接競合する新たな思考様式であると同時に…哲学がそこに反省のための素材を見いだすことができる思考対象でもある」(B 1987, 53)。

非哲学化し脱哲学化した社会学は哲学の社会学への従属化に向かい、さらには自らが哲学にとって代わろうとする意図を示す。社会学は単に哲学に対して予備教育的役割を果たすだけではなく、「哲学に不可欠で、現在は哲学に欠けている基礎を哲学に提供するよう定められている」(D 1975, 188, cf. D 1895, 140)とデュルケムが言うとき、社会学は隣接する諸学を統一するものとして成立するだけでなく、「人間が社会の産物である限り、人間は社会によって説明される」(D 1975, 185)のである以上、哲学も含めて人間に関わる限りでの全ての学に対して中心の地位を占めることになる。ブルデューの場合哲学に対する態度はより微妙なものがあるが本質的には変わらないと言ってよい。哲学に対する社会学的批判は単なる哲学のための予備的前提であるだけではなく、「哲学についての『哲学』の原理へと導く」(B 1997, 41)。なぜなら「哲

学界に特有の論理とそこで生まれ遂行される『哲学的』と社会的に認められた様々な性向と信念の分析よりも哲学的な活動はない」(B 1997, 40) からである。かつて哲学が占めていた地位を社会学が奪うと同時に、その社会学が哲学の原理を与え、今度は自らを哲学と名乗り始める⁽⁷⁾。

IV

このように、たとえブルデューがデュルケムを「古典的社会学」と規定してそこに自らの距離を設定しようとしても (cf. B 1982, 10), 社会学による哲学批判としては、哲学に対する社会空間の先行性と哲学のそこへの帰属性の確認、哲学の社会的・歴史的諸条件の忘却と哲学には思考されないものの存在の指摘、哲学に対する素材の提供と哲学の自己理解への寄与、そして哲学の地位の奪取と哲学に対する基礎付けという4つの点において両者は本質的に共通している。

しかしそうであれば、現在我々が「冷戦」の中での社会学による哲学批判として見いだすものは100年前の批判の反復であるということになる。今日の前で演じられている光景は100年前から既に何度か反復されてしまっているものなのである。従って、哲学に対する社会学の批判が、そもそも社会学が自律的な学として成立した当初から存在し、それも同様の仕方での批判が50年後も、またさらに100年経った今も繰り返されていること、すなわち哲学に対する社会学の批判は、周期的なものか継続的なものかはともかくおよそ100年前の哲学に対する批判の再現・反復であるということ、そのことが意味しているのは、社会学の哲学に対する批判を含めた、哲学と社会学を取り巻く知の布置、哲学と社会学がその中にある構図が、およそ100年前に社会学が学として成立した当初からほとんど変わっていないということ、言い換えれば100年前に形成された構図が現在においても哲学と社会学の関係を多かれ少なかれなお規定し続けているということであろう。

その構図の中では⁽⁸⁾、哲学に対する批判を行うことで、社会学の哲学に対

する優位性を確認するという作業が反復されてきた訳であるし、特にそこで社会学の側からの哲学に対する攻撃が極めて激しいものとなるのはその学としての後発性を取り戻さんがためにも当然必要不可欠な戦略となろう。それに対して、メルロ＝ポンティなどを例外とすれば、社会学の側からの批判に正面から答えようとした哲学者は稀であるように思われる。そうした哲学者の反応が、歴史的に見て発生時期は社会学に遥か先行し、社会学がその内で生まれたと言える哲学の、また学問世界においても既に確固たる地位を有し、教育制度の中で特権的な地位を占めている哲学の余裕のなせる業なのか、あるいはそれにもかかわらず様々な局面で既にその地位が脅かされつつある哲学の自己防衛のための盲目的な否認の身振りなのか、いずれにせよその反応自体が社会学に対する哲学の優位性を示そうとする態度であったのだろう。

こうした冷戦の端緒において、デュルケムの哲学批判に対し異議を申し立てたのは、当時の哲学界のアカデミズムの中心に確固たる地位を占めていた哲学者たちであるよりは、むしろその余白に位置する一人の哲学者タルドであったというのは象徴的である。デュルケムがあれほど執拗なまでにタルドを攻撃したのも、当時の社会学内部での覇権の獲得を狙ったデュルケムの自己示威活動の一環であったことは勿論であるが（そして実際デュルケムはそれに成功したが）、おそらくはそれ以上にデュルケムが苛立ったのはタルドの中に見られる哲学そのもの⁽⁹⁾だったのであり、だからこそデュルケムはタルドに対して「科学の否定」（D 1975, 86, D 1975, 115）、科学に対する「反動」（D 1970, 130, D 1975, 115）と激しく罵ったのである。確かにタルドは「科学は進歩の最終段階ではあり得ないのではないか」（T 1895, 357）と問うが、しかしながらまた「現代哲学は現代科学からもはや分離され得ない」（T 1900, 242）というのがタルドの基本的な姿勢である。哲学は科学から分離され得ないが、にもかかわらず「科学がそれぞれの時代において立ち止まらなければならなかった認識よりも、あるいはより内密でより深い認識を、あるいはより広大で包括的な認識を哲学は常に熱望する」（T 1900, 237）。だからこそ「デュルケム氏の存在論的魔術と我々のネオ・モナドロジー仮説の間で選択しなければならな

い」(T 1898, 76) とタルドが決断を促す時、賭けられているのは哲学と社会学の関係の在り方なのである。

ともかくこのような哲学と社会学の争いは学問世界内部での諸学の闘争の一例であり、100 年前に始まった哲学と社会学の「冷戦」は現在に至るまでなお反復され続けている。とすれば、社会学的知の言説が如何に形成されてきたのか、つまり一つの学としての社会学の言説が如何にして他の学の言説から自らを区別して成立してきたのかという問題は、同時に社会学のみならず他の諸学との内的・外的な関係における哲学的言説の自己形成についての反省を要求することになる。つまり或る時代の或る場所において、如何なる権利を持って語り得るのかということが哲学的言説自身についてもやはり自ら問われなければならないのである。

註

メルロ＝ポンティ、ブルデュー、デュルケム、タルドの著作の引用・参照は著者名(M と B と D と T で略記)と出版年(メルロ＝ポンティ以外)とページ数で文中に指示する。

Maurice Merleau-Ponty

Signes, Gallimard, 1960 (M)

Pierre Bourdieu

Questions de sociologie, Minuit, 1980 (B 1980)

Leçon sur la leçon, Minuit, 1982 (B 1982)

La chose dite, Minuit, 1987 (B 1987)

Réponses, Seuil, 1992 (B 1992)

Méditations pascaliennes, Seuil, 1997 (B 1997)

Émile Durkheim

De la division du travail social, Félix Alcan, 1893 (D 1893)

Les règles de la méthode sociologique, Félix Alcan, 1895 (D 1895)

La science sociale et l'action, PUF, 1970 (D 1970)

Textes, Tome I, Minuit, 1975 (D 1975)

Gabriel Tarde

Essais et mélanges sociologiques, Storck, 1895 (T 1895)

Études de psychologie sociale, Giard & Brière, 1898 (T 1898)

«Leçon d'ouverture d'un cours de philosophie moderne», *Archives d'anthropologie criminelle* XV, 1900 (T 1900)

- (1) ただし後で指摘するように、冷戦といっても両者の関係は対称的なものではない。
- (2) Cf. Jacques Donzelot, *L'invention du social*, Fayard, 1984, pp. 76~86.
- (3) *Ibid.*, p. 83.
- (4) *Ibid.*, p. 84.
- (5) しかしそうだとすればタルドが指摘するように「客観性が絶えず問題になっているこの本（『社会学的方法の規準』——引用者）以上に優れて主観的なものはない」（T 1895, 199, note 1）ということになる。このことの意味については別の機会に論じる。
- (6) 「哲学者たちは…彼らの諸概念と理論的遺産の歴史化をしばしば拒否する」（B 1987, 27）。
- (7) 「もし社会諸科学が哲学に対する脅威となっているとしても、それは哲学によってこれまで独占されてきた諸領域を社会諸科学が横取りするからではない。それは何より社会諸科学が、専門哲学者の地位と立場の中に暗黙の内に刻み込まれている哲学とは完全に相対立する（歴史主義的だけれども合理主義的な）一つの哲学を（暗黙の内にであれはっきりとであれ）与えるからである」（B 1992, 132）。こうした自らの社会学の立場は、「哲学と通常同一視される全体化的野心を拒否するという配慮」（B 1987, 30）から来ており、「社会学はあらゆる科学と同じく、哲学の野心である全体的野心に逆らって構築される」（B 1980, 49）とブルデュエは言う。しかしその社会学が「自分自身と他の諸学について批判的な学」（B 1980, 49）たらしとする時、社会学自身が大規模な全体化的野心にとりつかれているのではないかという嫌疑もまた逆に掛けられよう。
- (8) ここでは特にフランスでの哲学と社会学を念頭に置いているが、勿論哲学と社会学をめぐる構図、また哲学と社会学の文化的身分や教育制度における地位などについては日本とヨーロッパ、アメリカなどでは事情はかなり異なってくるであろうし、ヨーロッパの中でも例えばドイツとフランスとは異なるだろう。
- (9) ただし「哲学的異端」の可能性に賭ける（cf. T 1895, 358, cf. 347）タルドの哲学は、哲学的アカデミズムの記録保管所の中に保存されるまでには至らず、異端ですらないものとして忘却されてしまったのであるが。